

松江市文化財調査報告書 第85集



文化財愛護
シンギルマーク

北小原古墳群発掘調査報告書

2000年9月

松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

報告書抄録

ふりがな 書名	きたこはらこふんぐんはくつちょうさほうこくしょ 北小原古墳群発掘調査報告書					
著者名						
巻次						
シリーズ名						
編者名	藤原 哲					
編集機関	松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団					
所在地	〒690-0886 島根県松江市母衣町180-21					
発行年月	2000年(平成12年)9月					
調査原因	中国セララー無線局建設工事					
所収遺跡名	所在地	ユ ニ ド	北緯	東経	調査年月日	調査面積
北小原古墳群	松江市西浜佐陀町	市町村	遺跡番号	35°28'19"	33°00'00"	000615～ 000929 236m ²
所収遺跡名	種別		主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北小原古墳群	古墳群	32201	古墳時代	古墳	鏡・土器 鉄器	

序

松江市は古代出雲文化の中心地として、『出雲國風土記』に記された自然的・歴史的文化遺産に恵まれた都市です。また、近世以降は城下町として栄え、小泉八雲などの文化人を輩出し現在、「国際文化観光都市」として文化的涵養に力を注いでおります。

このたび、西浜佐陀町の北小原古墳群で古墳が二基発見され調査を実施しましたところ、古墳時代前期の古墳であることがわかりました。また、土器棺や小型彷製鏡など注目すべき遺構・遺物が検出されました。

これらの成果は周辺の歴史、特に古墳時代が開始された時代の郷土の歴史を考える上で、非常に貴重な資料となるものです。

最後になりましたが、本遺跡の発掘調査にご指導、ご協力いただきました関係機関、関係者、地元を中心とする市民の方々に厚くお礼申し上げますとともに、今後とも文化財の保護にご支援、ご協力をいただきますようよろしくお願ひ申し上げます。

平成12年9月

松江市教育委員会

教育長 原 敏

例　　言

- 1 本書は平成12年度に実施した、北小原古墳群の発掘調査報告書である。
- 2 調査は中国セルラー電話株式会社から松江市教育委員会が依頼を受け、その委託をうけた財団法人松江市教育文化振興事業団埋蔵文化財課が、平成12年6月15日から平成12年7月29日まで実施した。遺物整理は調査終了後に開始し平成12年9月30日に完了した。
- 3 発掘調査の組織は以下の通りである。

依頼者　中国セルラー株式会社

主体者　松江市教育委員会

事務局	教　育　長	原　　敏
	副　教　育　長	神田　義之
	生涯学習課長	川原　良一
	文化財室室長	岡崎雄二郎
	文化財係長（主幹）	吉岡　弘行
	文化財係（主任主事）	古藤　博昭

実施者　財団法人松江市教育文化振興事業団埋蔵文化財課

	理　事　長	松浦　正敬
	専　務　理　事	米出　喜雄
	常　務　理　事	福井　勝美
	事　務　局　長	柳浦　孝行
	調　査　係　長	瀬古　諒子
調査者	調　査　員	藤原　哲
	嘱　託　員	廣瀬　貴子

- 4 発掘調査並びに内業整理については下記の方々の参加・協力を得た。記して感謝する。
石倉クニ 上田孝子 上田礼子 奥田美保子 株式会社佐藤組 高麗優子 志谷亜沙子 杉谷敦子
杉谷清子 高橋歩実 花田陽子 広江光洋 藤崎和子（五十音順 敬称略）また松江市教育委員会
文化財室からは特に飯塚啓太 下田幹子の諸氏に現場作業についての多大な協力を得た。
- 5 発掘調査並びに内業整理については下記の方々の指導・教示を得た。記して感謝する。
赤沢秀則（鹿島町教育委員会） 池淵俊一（島根県埋蔵文化財調査センター） 太田宏明（河内長
野市教育委員会） 川西学（鹿島町教育委員会） 澤田順弘（島根大学教授） 下條信行（愛媛大
学教授） 白石耕治（和泉市教育委員会） 植真治（島根県教育庁文化財課） 中西和子（河内長
野市立ふれあい考古館） 松本岩雄（島根県埋蔵文化財調査センター） 森下章司（京都大学大学
院文学研究科助手） 渡辺貞幸（松江市文化財保護審議会委員） （五十音順）
- 6 本書の執筆・編集は藤原が行った。

目 次

序	
例 言	
目 次	
第 1 章 調査にいたる経緯.....	1
第 2 章 位置と環境.....	5
第 3 章 調査の成果	
1 北小原 2 号墳	
調査開始時の状況.....	9
墳 丘.....	9
周溝（溝 1）.....	11
箱式石棺.....	11
2 北小原 3 号墳	
調査開始時の状況.....	12
墳 丘.....	12
周溝（溝 2）.....	14
箱式石棺.....	14
3 その他の遺構と遺物	
土器棺 1	18
土器棺 2	22
土壙墓・溝 3	22
石材集積地点.....	23
その他の出土遺物.....	23
第 4 章 ま と め	
1 出土鏡について.....	24
2 小 結.....	25

挿 図 目 次

第 1 図 周辺の遺跡分布図.....	3～4
第 2 図 遺構配置図.....	7～8
第 3 図 北小原 2 号墳土層断面図.....	10

第4図 溝1 出土遺物・同検出状況	11
第5図 2号埴箱式石棺（蓋石）実測図	11
第6図 北小原3号墳土層断面図	13
第7図 3号埴箱式石棺実測図	16
第8図 3号埴箱式石棺出土遺物	17
第9図 土器棺2実測図	18
第10図 土器棺1実測図	19
第11図 土器棺1出土遺物	20
第12図 土器棺2出土遺物	21
第13図 土壙墓1・溝3実測図	22
第14図 石材集積地点	23
第15図 表土他出土遺物	23

表 目 次

表1 周辺の遺跡	6
表2 石材鑑定表	23

図 版 目 次

図版1 北小原2号墳（南西から）	2号埴箱式石棺、溝1、土器棺1（北東から）
図版2 溝1、3、土壙墓1土層断面	北小原3号墳（東から）
図版3 北小原3号墳、溝2（西から）	北小原3号埴箱式石棺
図版4 北小原3号埴箱式石棺珠文鏡復元検出状況 北小原3号埴箱式石棺外鉄製品検出状況	
図版5 土器棺1 検出状況	同上 土器片撤去後
図版6 土器棺2 検出状況	土壙墓1、溝3 全景
図版7 土壙墓1 枕状石	溝1 石材集積地点
図版8 3号埴箱式石棺出土珠文鏡	同上 鉄製品
図版9 土器棺1 出土状況（棺身）	同上（棺蓋）
図版10 土器棺2 出土遺物	同上
図版11 溝1 出土遺物	表土・包含層出土遺物

第1章 調査に至る経緯

1 調査に至る経緯

中国セルラー電話㈱は松江市西浜佐陀町に携帯電話の無線局を建設することになり、分布調査の依頼を受けた松江市教育委員会は試掘調査を実施した。試掘調査の範囲内においては、遺構・遺物が検出されなかった。そこで、工事が開始されたところ、丘陵尾根上に石棺二基が検出され、工事施工者によって西側の石棺（北小原3号墳）が開口され石棺内より小型仿製鏡が検出・取り上げられた。

知らせを受けた松江市教育委員会と中国セルラー電話㈱との間で協議が持たれ、工事の一部変更によって東側の石棺（北小原2号墳）は現状保存に決定し、3号墳石棺については棺内の調査を行い、復元したのち保存することとなった。

現地調査については勘松江市教育文化振興事業団が松江市教育委員会からの委託を受け、平成12年6月15日より平成12年7月29日まで現地調査を実施した。遺物整理は現地調査終了後直ちに開始し、平成12年9月30日に終了した。

2 調査開始時の状況

調査開始にあたっては、既に工事により遺跡内での一部攢乱が行われていた。開始時の所見を記すと以下の通りである。

石室は2基ともに検出されており、うち3号墳石棺は蓋石のほぼ全てが開口後、任意に蓋石が戻されていた。石室の周辺も掘削と盛土が行われており、掘方等の検出は困難に思えた。工事関係者によれば、出土した鏡は石棺南西隅に立てかけられており、鏡背が石棺に接していたとのことであった（図版5 珠文鏡復元検出状況）。その他、石棺内には玉砂利が存在したという証言を得た。

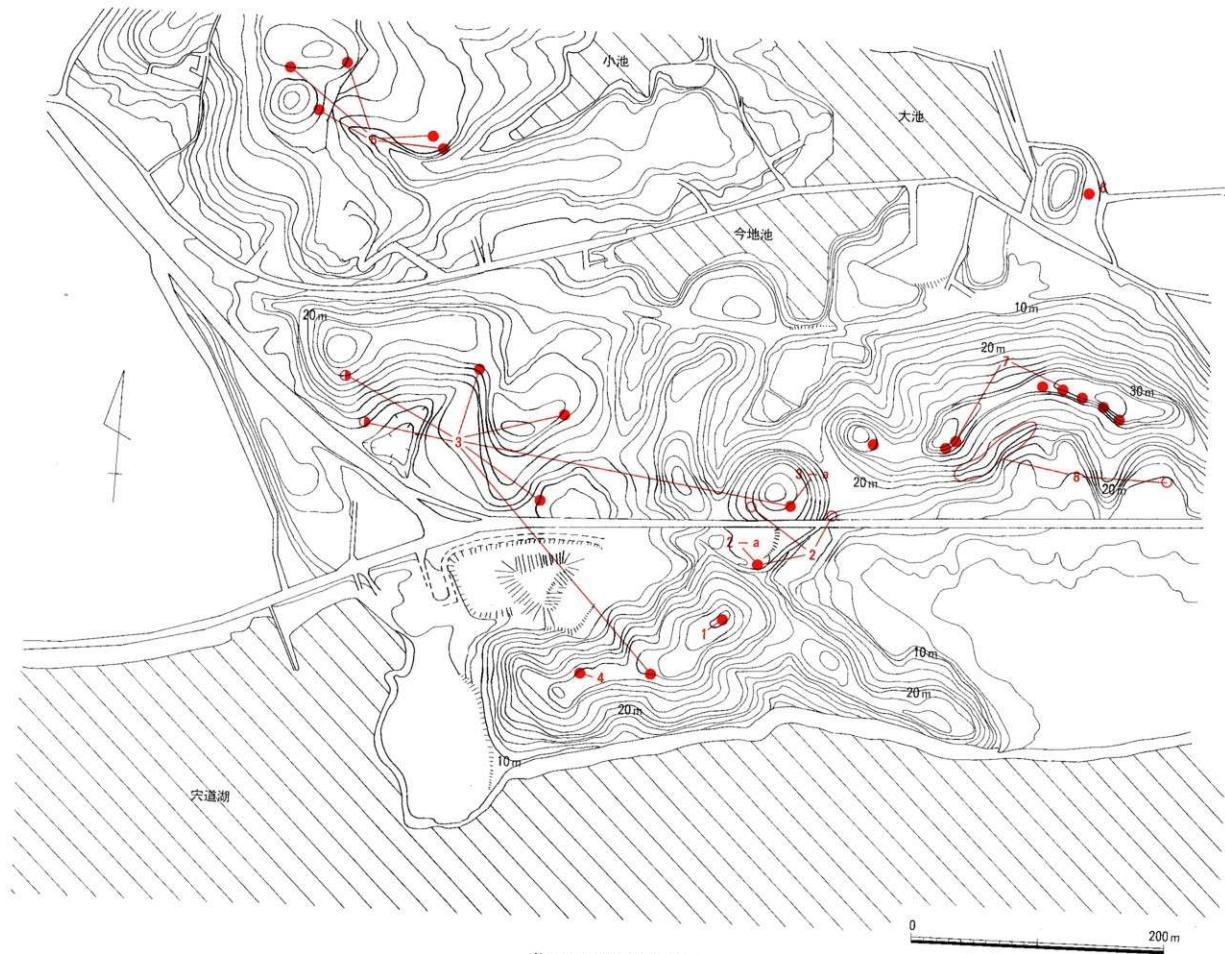
3号墳の石棺は検出したのみで遺構そのものは攢乱されておらず、保存状態が良いことから、現状保存することとなった。

工事施工範囲においては木の伐採とユンボによる一部掘削が行われていたが、掘削の中心は丘陵の最も高い部分（3号墳の墳頂平坦面）とユンボの通り道であり、かかる排土を周辺に盛り土していた。

基本層序は表土（腐植土）が5cmほど堆積しており、その下に明茶褐色砂質土の地山面に至る。部分的には表土と地山の間に灰色砂質土、又は茶褐色土が20cm前後堆積していた。

丘陵の南東側斜面については、重機により掘削が行われ地形の改変が認められた。

古墳の墳丘については2号墳の北東半分が工事範囲外で現状をよく残しており、テラス状の平坦面も認められた。



第1図 周辺の遺跡分布図

第2章 位置と環境

地理的環境

調査地は松江市西浜佐陀町に所在する。地形的には島根半島北山山系から派生する丘陵先端部に位置しており、南に向かって宍道湖北岸に面し、同湖を一望できる格好の地点である。古墳群は周辺の丘陵内では最高所の139mに立地している。

周辺の古墳としては、国道431号線を越えたすぐ北に釜代1号墳（3-a）があり、北東隣の丘陵には寺津古墳群(7)、北西隣の丘陵には金代古墳群(3)、古曾志大塚古墳群(5)が存在する。（図1）

現状では、国道431号線によって丘陵が切断されているため、北小原古墳群と釜代1号墳は一見立地を異にする感じを受けるが、大正4年に陸地測量部が測量した2500分の1地形図を参照すると、これらの古墳群は同一丘陵内であった（北小原古墳群の方が若干地形的に高い）ことが分かる。また、釜代1号墳は古墳時代前期（小谷式前後）を主体とするものであるが、調査の結果北小原古墳群も同時期に古墳が築かれていることが知られる。

これら二つの古墳群は、現状の小字の相違によって北小原古墳群と釜代1号墳と名称を異にはするが、以上の地理的環境や時期的併行関係からいって「古墳群」としては同一視した方が良いと考えられる。そのため「古墳群」としての同一性、及び歴史的意義（例えば同系統のクランや身分など）を考慮した場合、現状の名称のままでは混乱を招く恐れがある。そこで、遺跡の名称としては釜代1号墳も北小原古墳群に合むとか、「釜代・北小原古墳群」等の名称に改変する案を提示したい。

遺跡名の名称は行政的な手続きや新発見によって更に変わる可能性もあり、一朝一夕にはなし得るものではないであろう。しかし近い将来、調査の成果によって遺跡の範囲と名称がより整理されることが望ましい。遺跡名と範囲については今後の検討課題としたい。

歴史的環境

北小原古墳周辺で知られている最古の物質文明の痕跡としては、古曾志清水遺跡などから旧石器が出土しており、宍道湖底遺跡からは縄文土器が採集されている。このように当概地では古くより人類の活動があったことを予測させる。しかしながら、考古学的には集落遺跡が不明な点が多く、むしろ古墳時代中期から終末期にかけて古墳が集中する地域として知られてきた。

古墳時代前期の古墳としては松江市域内でも極めて少ない。宍道湖北岸に目を広げても北小原古墳群に比較的近いものとして、釜代1号墳（西浜佐陀町 3-a）、月廻り古墳群（法吉町）、道仙古墳群（東持田町）などが知られている。

古墳時代中期になると古墳の数は増加し、北小原古墳群の周辺にも古曾志大塚古墳群(5)、古曾志大谷1号墳、丹花庵古墳など特色のある大型古墳が築かれる。古曾志大塚古墳(5)には径47mの県内最大の円墳を含み、古曾志大谷古墳は全长42mの前方後方墳、丹花庵古墳は長持型石棺を有する47mの方墳である。

続く古墳時代後期から終末期にかけては、玄門閉塞石に門状の陽刻を施した北小原横穴墓（2-

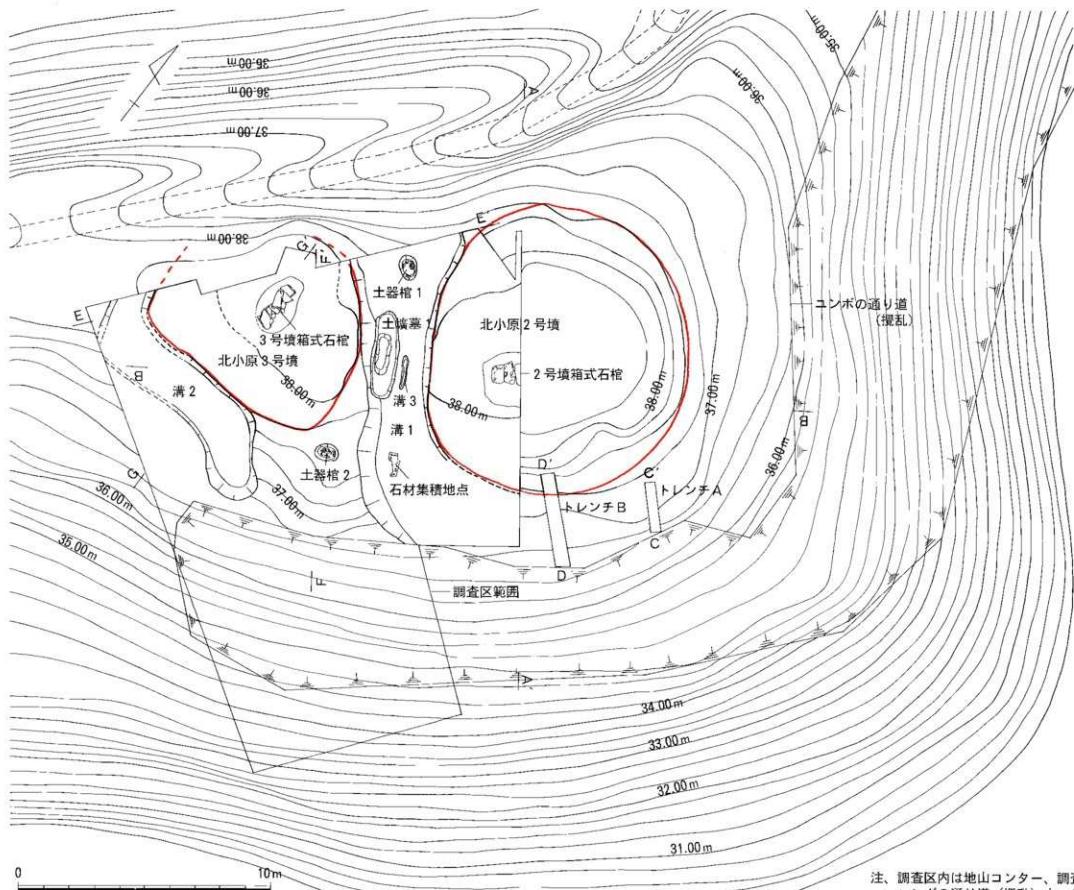
a)、寺津横穴群(8)などが築かれている。

古代律令制下にあって当概地周辺は佐陀川を境として秋鹿郡に属していたが、『出雲国風土記』に見える「狭田国」が鹿島町から当地域を中心として存在していたことが指摘されている。

中世以降の考古学的な遺跡数は少なく、浜佐陀町にある満願寺の裏に満願寺城などが知られる程度である。

表1 周辺の遺跡

1	北小原古墳群	本報告書参照	
2	北小原横穴群	4穴以上、整形家型石棺	2-aが北小原横穴墓
3	釜代古墳群	円墳3、方墳2、半墳2	3-aが釜代1号墳
4	釜代横穴	ドーム型、須恵器床	
5	古曾志大塚古墳群	円墳1（径47m）方墳（辺8～17m 6基）	
6	神主塚古墳群	前方後方墳（全長21m）	
7	寺津古墳群	円墳1、方墳10	
8	寺津横穴群	5穴、推定地3穴以上	



注、調査区内は地山コンター、調査区以外は地表コンター
ユンボの通り道（擾乱）内コンターは工事前の測量図
を基にした復元コンター

第2図 造構配置図

第3章 調査の成果

1 北小原2号墳

調査開始時の状況　調査開始にあたっての北小原2号墳の状況は以下の通りである。

無線局設置の工事は既に開始している状況であった。2号墳の南西半分は工事予定区に入ってしまい、箱式石棺が7割ほど露出していたが、石棺内そのものは擾乱を受けていなかった。

工事予定区外の北東半分は三角点を中心に墳丘の盛り上がりを見せており、方墳、若しくは円墳であろうと予想した。しかし三角点建設の時に一部削平された可能性もあり墳丘は当時のままでないことが考えられた。

工事区外の北隅と東隅についてはテラス状の平坦面も確認できたが、南西隅の3号墳との接点では明確な墳丘が確認できなかった。

また、土器棺1の破片が表土のすぐ下、GL-5cmで検出されていた。掘削された部分の土層を確認しても表土のすぐ下からは赤褐色の地山面が見えており、造構面は極めて浅い状況であった。しかも、ユンボによって掘削された排土を周辺へ任意に盛土していたため、調査開始にあたっては、この排土を撤去する必要性が認められた。

そこで、現状のコンタ測量を行った後、排土及び表土を掘削し造構検出に努めた。その結果、2号墳と3号墳との接点で「溝1」が検出された。「溝1」内からは「土器棺1」と「石材集積地点」が検出できた。

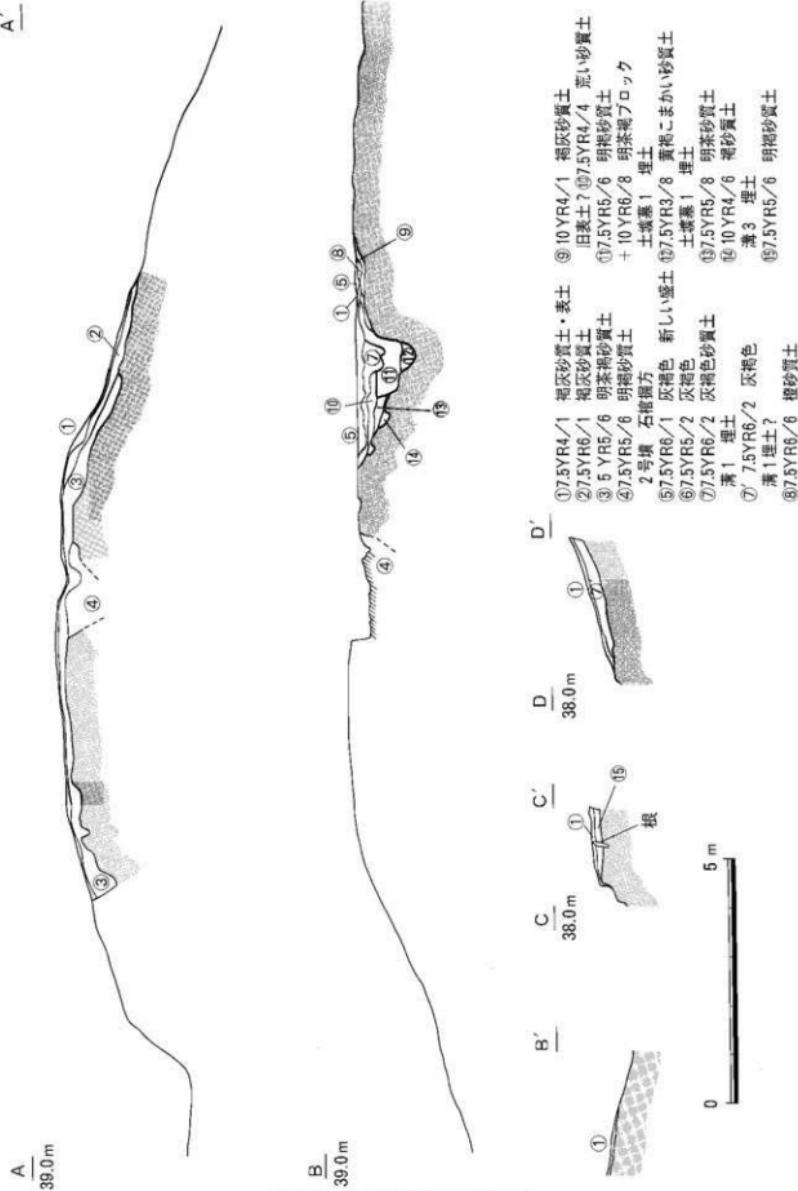
墳丘 北小原2号墳は長軸11m、短軸10mの若干楕円状の円墳である。但し、調査を行ったのは墳丘の南西半分のみであり、方墳の可能性も否定できない。調査地内は表土の下にすぐ赤褐色の地山が検出され、一部で灰色土（溝1）が認められた。明確な墳丘盛土は確認できなかった。

調査区内に位置する墳丘の南西側では、灰色土が堆積した「溝1」が墳丘を区画している。これに対して調査区外の墳丘南西は丘陵の斜面を利用した地山切出しでテラスを造っているようである。主体部の石棺軸N-54°Eであり、古墳の主軸は北東又は南西軸であると考えられる。

葺石、埴輪等の外部施設は存在しなかった。

以上のように、北小原2号墳の墳丘形成は地山切り出しによる築造が想定される。しかも丘陵端部という自然地形を利用しておらず、丘陵端部の斜面に地山切出しによってテラスを築く、これに対して南西側は「溝1」によって墳丘を区画するが、「溝1」は後述するように本來は自然の落ち込み状のものであったと考えられ、これに若干の切出しによって溝1を築き墳丘を区画していたものと考えられる。

このため、墳丘基底部の絶対高は北東と南西で著しく異なる。いずれにせよ、墳丘の南西側は北東側に比べて古墳造営省略的印象を強くする。



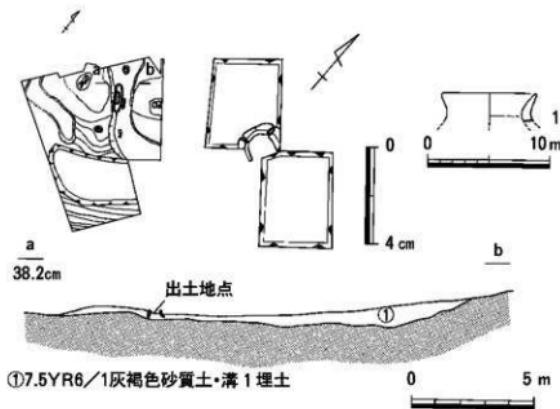
第3図 北小原2号填土層断面図

このような造りのため、古墳は北東から見ると造形が最も精美に見えるであろう。この北東の先には佐陀川が形成する沖積平野が所在する。一方、宍道湖は古墳の南側にある。

周溝（溝1） 調査地中央部を北西から南東にかけて走る溝で2号墳と3号墳の境界上に位置する。幅2~5m、深さ0.3m程度のもので埋土は灰色の単層である。溝としたが、本来は自然地形の窪み状のものであったと考えられる。但し、断面で観察すると墳丘形成のために地山を切り出したと思われる箇所が存在する。そのため、自然地形に若干の加工を施して墳丘の区画を意識しているものと考えられる。また、

遺構検出面が現在の地表面より極めて浅いことから後世の削平が予想される。溝の堆積層である灰色土より土師器片（図4）、石材片（図14）が検出され、溝1を切った状態で「土器棺1」が検出できた。

出土遺物(1)は土師器、小型壺の口縁で口径7.5cm、残存高2.4cmを測る。また、溝の下層より土坑1と溝3が検出された。（図10・図版2）



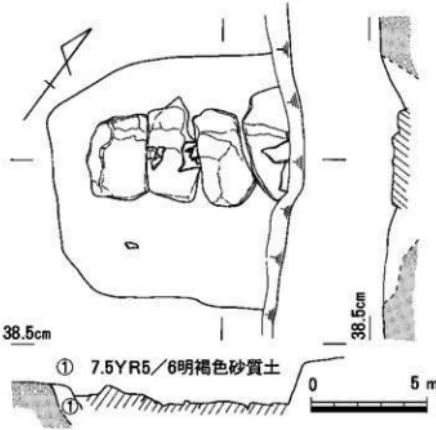
第4図 溝1 出土遺物・同検出状況

箱式石棺 2号墳の箱式石棺は蓋石のみの検出である。調査開始時には工事によって既に露出していた。

検出したのは4枚の蓋石で石材は板状の凝灰質砂岩である。石材の間には部分的に青色粘土の目張りが確認できた。軸をN-54°Eにとり、東端は調査区外に延びる。

堀方は幅1.2m、検出長1.1mである。堀方埋土は地山とほぼ同じ茶褐色土であり、地山土の埋め戻しが想定される。

なお、2号墳箱式石棺は松江市教育委員会と開発事業者との協議により現状保存が決定したため未調査である。



第5図 2号墳箱式石棺（蓋石）実測図

2 北小原 3 号墳

調査開始時の状況 調査開始にあたっての北小原 3 号墳の状況は以下の通りである。

無線局設置の工事は既に開始している状況であった。特に工事の中心部分は 3 号墳の墳頂部分であった。このため、主体部である箱式石棺はほぼ全面的に露出しており工事施工者によって蓋石が開口、石棺内も掘削を受け小型仿製鏡が検出・取り上げられた後、蓋石は任意に戻されていた。石室の周辺も掘削と盛土が行われており堀方等の検出は困難に思えた。

3 号墳は 2 号墳に比べて墳形が明瞭ではなく、墳丘の北西部分も山道によって削られていた。それでも石棺が検出された地点は若干地形的に高く、10m 程度の方墳を想定した。工事によって掘削された北西の壁には周溝らしき灰色土が見られたが、2 号墳と 3 号墳との境については不明瞭であった。

3 号墳の墳頂周辺は工事による擾乱と排土による盛土が激しく、その撤去が第一に考えられた。

3 号墳も 2 号墳と同じく表土のすぐ下に茶褐色土の地山が見られ、遺構面は極めて浅い様子であった。調査は 2 号墳と並行してコンタ測量を行った後、排土及び表土を掘削し遺構検出に努めた。その結果、墳丘の南側で「溝 2」が検出でき、墳丘南東の斜面からは土器棺 2 が検出された。

墳丘 北小原 3 号墳は復元長辺 9 m、短辺 7 m 以上の方墳であると考えられる。方墳とした理由は後述する周溝の「溝 2」が、調査区端部で東西から南北へ直角に折れている状態が確認できた結果による。

墳丘の残存状態は非常に悪かったが、これは墳丘の北西部分が後世の山道によって削られていることと、無線局建設による工事開始によって墳頂部分が掘削されていたためである。

調査地は工事施工部分、墳丘の南東部分にある。調査地内の土層は 2 号墳周辺とはほぼ同一で、表土の下にすぐ赤茶褐色土の地山が検出され、一部で灰色土（溝 2）が認められた。明確な墳丘盛土は確認できなかった。

この灰色土は調査区北西壁で認められたものと繋がると考えられ、「溝 2」として調査を行った。

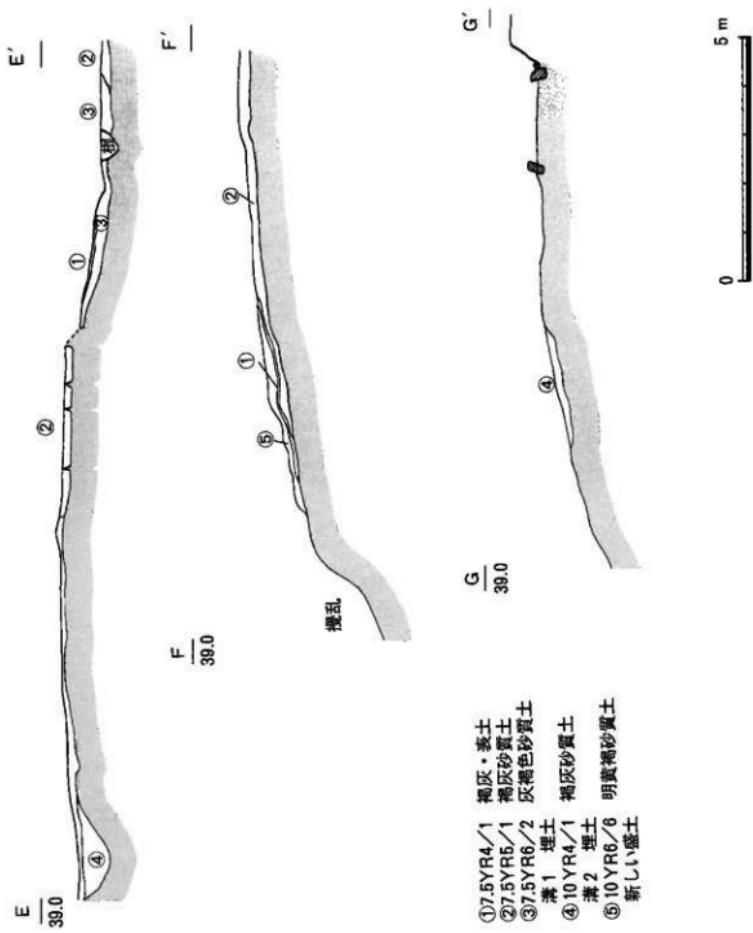
墳丘の南側はこの「溝 2」によって区画されており、北東側は「溝 1」によって区画されている。

「溝 1」と「溝 2」とのつながり及び斬り合いは不明であった。

主体部の石棺軸は N-10°W であり、古墳の主軸も南北にあると考えられる。

蓋石、埴等の外部施設は存在しなかった。

以上のように、北小原 3 号墳の墳丘形成は 2 号墳と同じく地山切り出しによる築造が想定される。ところで、土層断面で確認できた「溝 2」は最大深 0.5m 確認できた。これに対し、調査区内で検出したものは全て 0.1~0.3m 程度で、本来はもう少し深かったものと考えられる。これらのことから、3 号墳についても後世の削平が想定され、周溝についても痕跡程度のものが残存するにすぎない。



第6図 北小原3号墳土層断面図

周溝（溝2） 調査地西部で検出された南東に走る溝である。検出時は幅1.8m、深さ0.2mを測る。溝1と埋土、断面形態が類似することから当初、自然の落ちを想定した。しかし、調査区南西隅の調査区断面にて深さ0.5mの溝状の痕跡が検出されたため、同一の性格のものと判断した。

溝2の方位が墳丘とどのような関係にあるかを確認するために、調査区を拡張し、遺構の平面検出に努めた。調査範囲との関係により、全容を明らかにすることは出来なかったが、拡張区内では東西から南北へと方向を変え、以後南北に走っていることが確認できた。この方向は3号墳主体部の方位軸とほぼ一致しており、溝2は3号墳を区画した周溝の性格が考えられる。このため、3号墳の埴形は方墳に想定するに至った。

溝1とのつながりと切り合いは不明であり、出土遺物はなかった。

箱式石棺 調査区西端に位置する。工事開始時に石棺が検出、開口しているため石棺内の遺物（小型仿製鏡 2）が調査前に取り上げられている。また、石棺の南側は工事による攪乱が激しく認められ、攪乱排土によって石棺周辺が埋め戻されていた。その後、調査区の拡張によって石棺北端を良好な状態で検出し、石棺の全体把握に努めた。

石棺の構造は内法1.65m、幅0.3mの狭長のもので、怪0.5~1cm程度の小蹠を敷き詰めた礫床である。また、堀方内、側石に接して棺外に怪5cm程度の蹠を敷き詰める構造を有していた。石材は鑑定の結果、石棺の蓋石と側石が凝灰岩、棺外の玉砂利も凝灰岩であった（表2）。

出土遺物は石棺内より小型仿製鏡（珠文鏡）一面、石棺外（礫直上、及び堀方埋土）より短剣、又は槍状の鉄製品が二点出土している。

調査開始時の聞き取りによると小型仿製鏡（珠文鏡 2）の山土状況は、石室南西隅に立てかけられており、鏡背が石棺に接していたという証言を得た（図版4 珠文鏡復元検山状況）。山土遺物を観察した所、腐蝕の具合が約半分できれいに分かれており、鏡の半分は埋没している状況で、遺物が立てかけられていたことは間違いないと考えられる。

遺骸等は残存していないかったが、上の出土遺物の状態から、埋葬頭位は南にあったものと推定される。石棺の方位はS-10°E（磁北より）である。

出土遺物のうち、(2)は小型仿製鏡で、面径9.0cm、縁厚0.35cm、内区厚0.2cm、紐口径1.8cmを測り、鏡面は反りを持つ。完形であり、特に図8の図面上で4時から10時方向にかけての左半分は依存状態が特に良く、反対側は鋸の進行が著しい。これは鏡面においても同様であり、取上げ時に立てかけてあったという証言と一致する。恐らく、これを境に埋まっていた状態であろう。

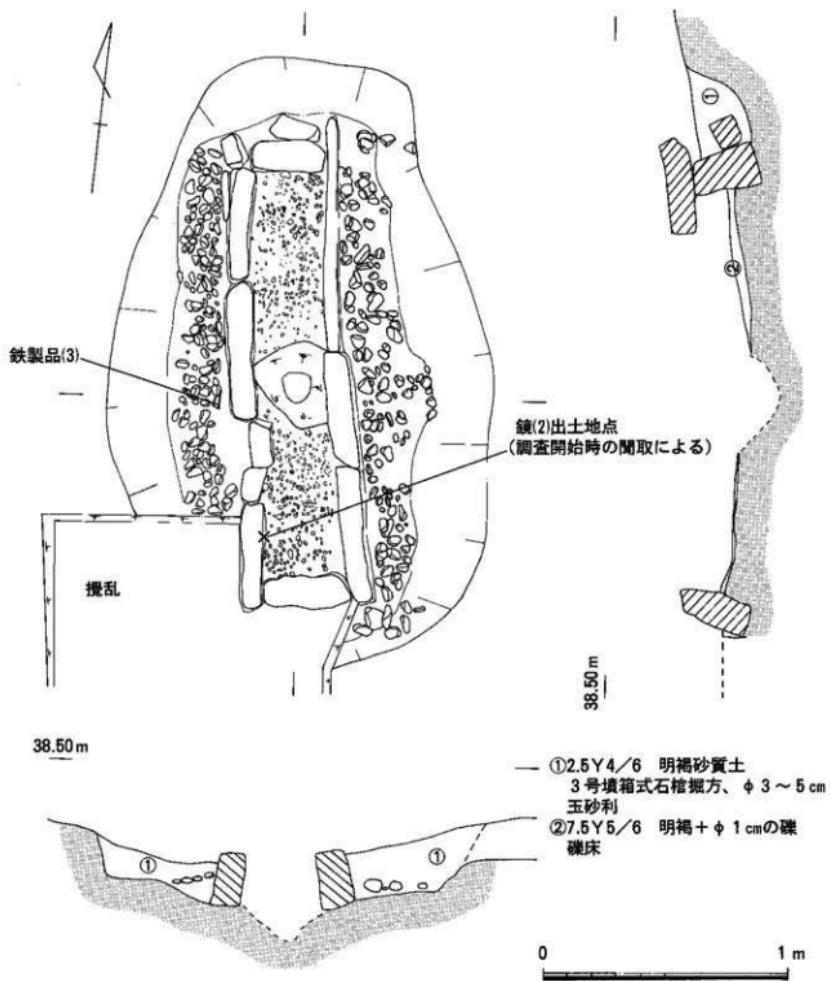
内区は紐の外周に境となる円弧がめぐら、その外に珠文帯がめぐる。珠文帯は比較的整った4列の珠文配置からなる。かかる珠文帯は乳等で4区画されるが、概ね12時と6時方向は2本の細い隆線で放射線状に区画し、その間に乳を置く。一方、3時と9時方向は若干弧を描いた房状突起を計2個づつ配し、その間に環状の突起を置いている。房状の突起はさらに3本以上の刻線がゆるやかに弧を描く。

内区外周には櫛歯文帯がめぐる。櫛歯文は0.2cm間隔の非常に細かい文様である。

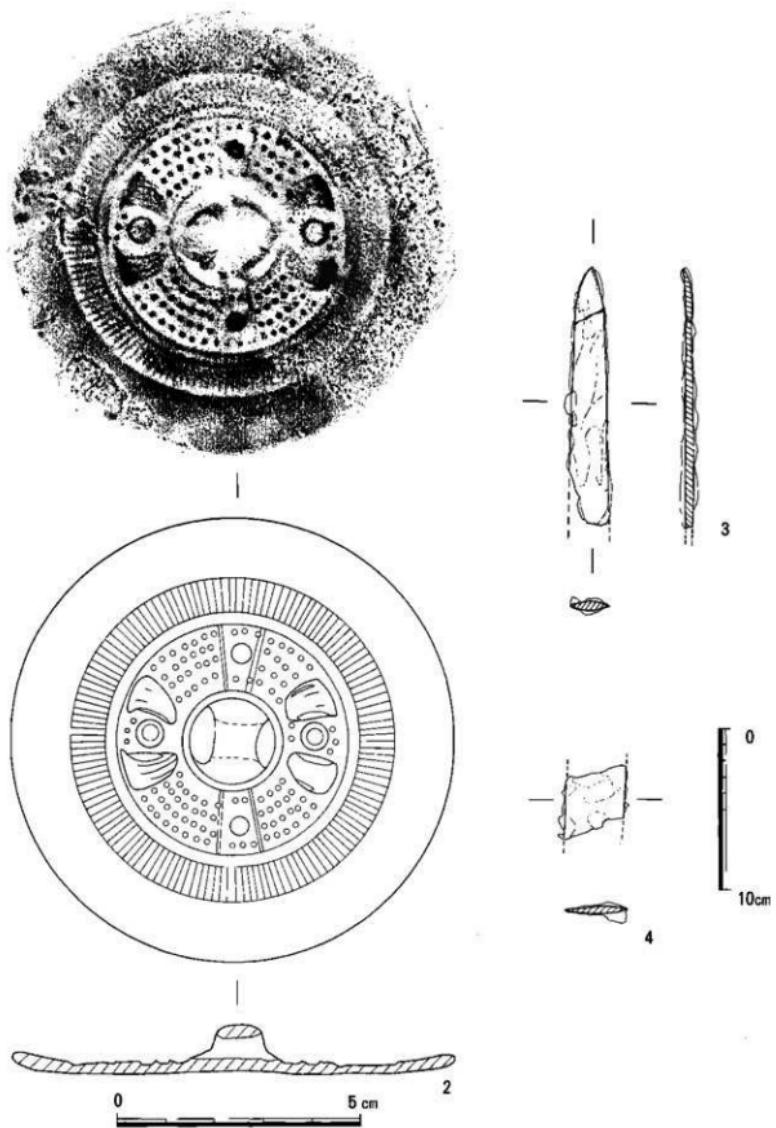
(3、4)は鉄製品。何れも両刃で短剣、若しくは槍状のものが考えられる。(3)は剣先が残り

15.4cm依存する。幅2.1cmで剣先が若干ねじれているが、本来的なものではないと考えられる。箱式石棺外、疊を敷き詰めた地点から出土している(図7)。特に疊の下から出土しているので(図版4)棺外の疊を敷く以前に棺外に置かれたものと判断できる。

(4)は幅3.8cm、残存長4cmの諸刃の鉄製品で、(3)と同じく短剣、若しくは槍状のものが考えられる。3号墳の石棺周辺の精査時に検出しており、一応堀方出土と考えたが、ウンボによる盛土である可能性も否定できない。



第7図 3号墳箱式石棺実測図



第8図 3号埴箱式石棺出土遺物

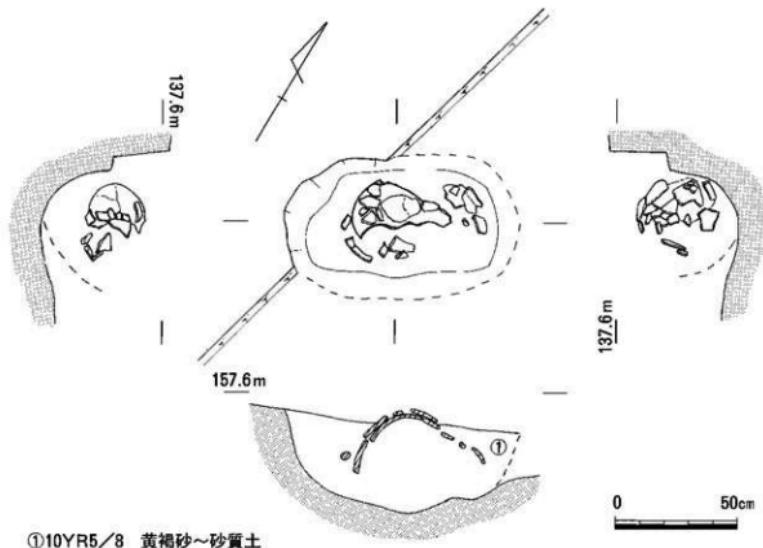
3 その他の遺構と遺物

土器棺 1 調査区北西で検出された。「溝 1」の埋土である灰色土を切り込んで設置されている。遺構は底部を穿孔した大型の壺を水平に埋め、しかる後、別個体の破片で口縁と底部穿孔部分を中心にしている構造である。最初に人型の破片で蓋を行い、しかる後、小片を張り付けている状況であった。土壇の堀方は長軸0.78m、短軸0.57mを測る梢円形である。検出した深さは0.45mを測る。口縁方位はN-32°Wで、概ね「溝 1」と同方向を示す。

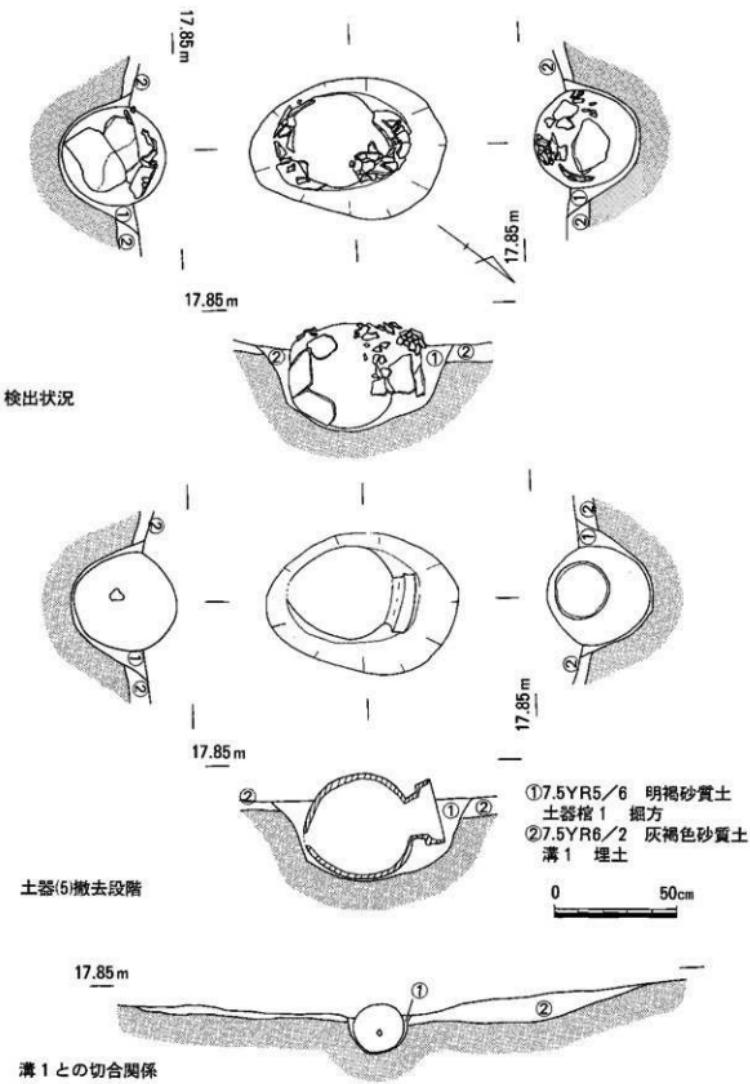
棺内からの出土遺物は無かった。

出土遺物は(6)が土器棺の棺身をなしていた大型の壺で、口径26.2cm、器高は50.1cmを測る。器形は最大径が肩部よりやや下がった位置にある倒卵形で、底部は焼成後の穿孔が認められる。頸部はやや膨らみをもち、頸部から水平に若干開いた後、口縁に至る。外面調整は上部がヨコハケ、下部がタテハケが残り、内面はケズリ、特に内面底面はユビオサエを行う。施文はない。

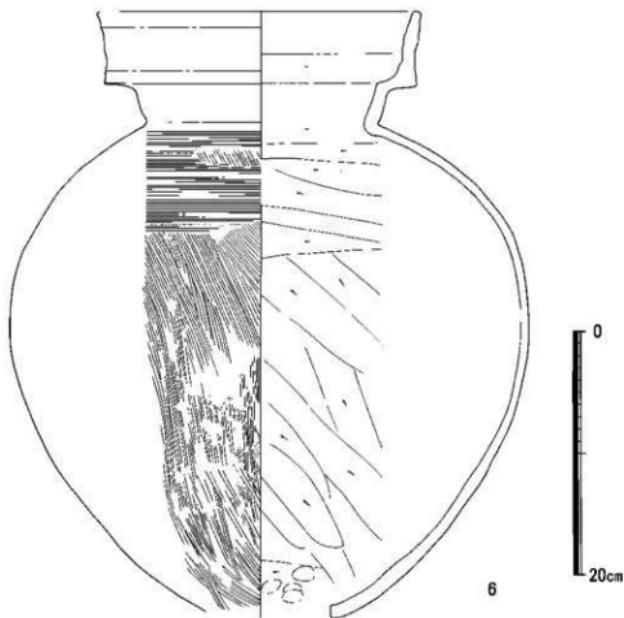
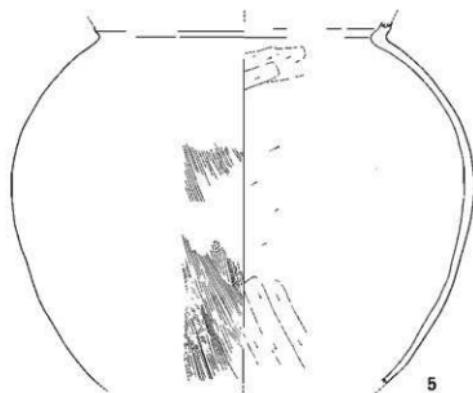
(5)の大型壺は上の(6)に蓋にしていたもので、破碎後に土器棺 1 の口縁と底部穿孔部分を覆っていたものである。肩部は23.5cm、残存高29.8cmを測る。(4)と同じく最大径が肩部のやや下にある倒卵型であろうと思われる。外面調整はナナメハケ、内面はケズル。肩からすぐ上がった所に若干の屈曲が見られるが口縁端部は検出されなかった。蓋にしていたもので、(5)以外の別個体と思われるものが存在したが、体部片のみで詳細は不明である。



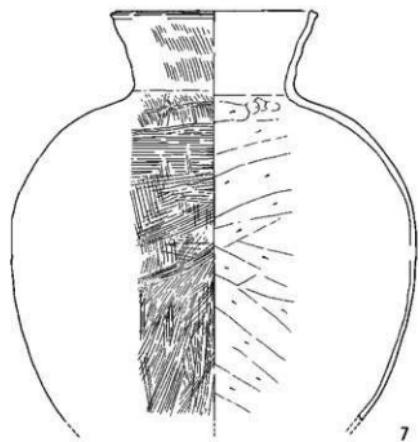
第9図 土器棺 2 実測図



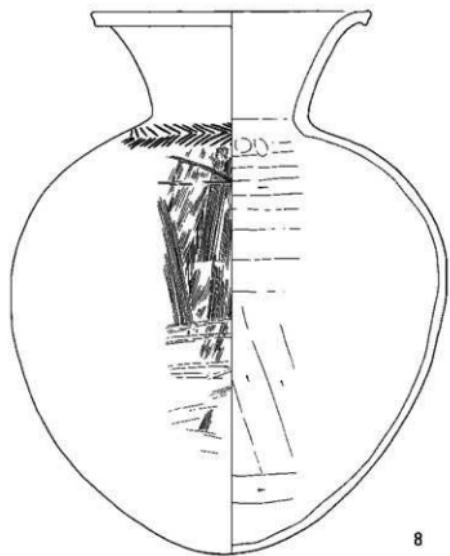
第10図 土器棺 1 実測図



第11図 土器棺 1 出土遺物



7



8



第12図 土器館2出土遺物

土器棺 2 土器棺 2 は 3 号墳の南で検出した。検出した土壙は平面形か長楕円で長軸 0.85m、短軸 0.5m を測る。検出した深さは 0.4m を測る。土壙の主軸は N-60°E、若しくは N-120°W である。

土器棺 2 は土器棺 1 と異なり、上器片が二重から三重に重なった状態で検出された。また、土壙底面からは土器片は検出されなかった。これらのことから、上器が上圧によって崩壊したとは考えられず、当初より上器片を破碎して被覆した状態であったと考えられる。

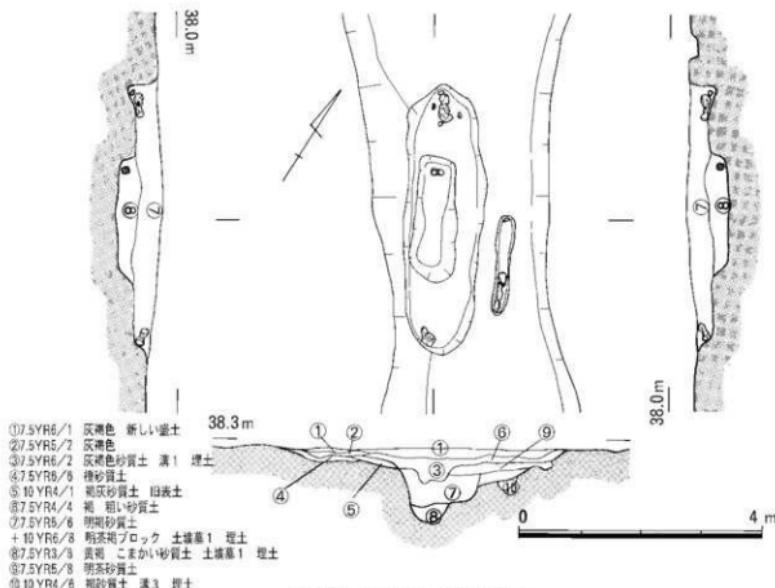
棺内からの出土遺物はなかった。

出土遺物は二個体の大型の壺型土器である。(7)の口縁は 16.0cm、残存高 33.4cm を測る。短く外反する単純口縁を持ち、口縁端部外面やや肥厚し、端部上面には沈線がめぐる。外面は荒いハケメが全体に残り、内面はケズリとオサエである。

(8)は口径 22.6cm、器高 44.1cm を測る倒卵型をした丸底の広口壺で、口縁は開き気味に外反した後、口縁端部に面をつくる。肩部に羽状文を施文するが、これは全周せずに途中で終わっている。外面はハケ、内面はケズリとオサエ調整である。

土壙墓 1・溝 3 調査区中央、「溝 1」の下層より検出された。土壙は長軸 4.4m、短軸 1.3m を測り、中央部の西よりもう一段下がる二段掘りである。二段目の内坑は長軸 2.1m、短軸 0.7m を測る。

土壙は黄色地山より切り込まれておらず、埋土は上層が地山ブロックを含む茶褐色土層で、下層が黄色砂である。自然堆積によるレンズ状の層はみられず、人為的に埋め戻された様相である。



土器等の出土遺物はなかったが、土壤の北端、及び南端に緑色砂岩による石塊が、また、内坑底面で枕状の石二点が検出された。

土壤の東側で溝3を検出した。溝の長さは1.65m、幅0.25mを測る。造構の性格は土坑に付属するものと考えられるが、断面上の折り合いで溝3が土壤1より古い様相を示す。

石材集積地点 調査区中央部、「溝1」内より検出された。箱式石棺の石材である凝灰質砂岩と同じ石片が集中して見られた。

石棺の石材片が「溝1」の落ち込み状に流れ込み、集積されたものと考えられる。

その他の出土遺物 表土・及びユンボによる盛土を掘削した時に須恵器片2を検出した。(8)は須恵器の壺の体部片である。外面にタタキ、内面に同心円を残す。仰は須恵器の杯の底部で糸切り痕を残す。9～10世紀、古代のものである。

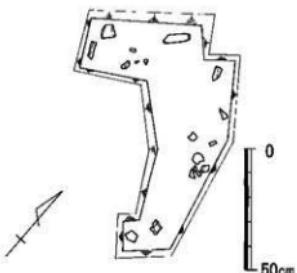


図14 石材集積地点

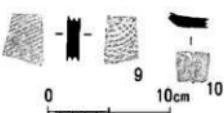


図15 表土他出土遺物

表2 石材鑑定表

1	2号箱式石棺	板状・層状中粒～細粒凝灰質砂岩	淘汰は良し
2	3号墳蓋石	極細粒、又は細粒～極細粒凝灰質砂岩	
3	3号墳側石	粗粒酸性凝灰岩	塊状、淘汰良し
4	3号墳玉石	細粒酸性凝灰岩	塊状、淘汰良し
5	石材集積地点	粗粒凝灰質砂岩	塊状、淘汰比較的良し
6	土壤墓1	中粒砂岩(松江層)	塊状、淘汰良し、柔らかい
7	同上・枕石	粗粒凝灰質砂岩	塊状、淘汰良し
8	溝3	粗粒凝灰質砂岩	塊状、淘汰比較的良し

これら岩石は全て島根半島あるいは宍道湖南に産出する中新世中期の岩石と推定される。6を除いた他は中期中新世(約1600～1500万年前)の川合層(または成相寺層)の凝灰質砂岩または酸性凝灰岩と考えられる。

6の中粒砂岩は他のものに比べてやや柔らかいことから、中期中新世(約1300万年前から1200万年前)の松江層の可能性が高い。上の石材鑑定については、島根大学 澤田順弘氏による。

第4章 まとめ

1 出土鏡について

出土した小型仿製鏡は鏡式としては珠文鏡といわれるものである。学史を尊重して先学の形式分類と比較するなら樋口分類の五類^(注1)、小林分類のB型^(注2)、森下分類の4式^(注3)、今井分類の4類^(注4)吉田分類の5類^(注5)などと概ね対応できるであろう。但し、珠文鏡には類似する文様は認められても、同一鏡が全く存在しないといわれる程の多様性が認められることは、これら先学の指摘にあるとおりである。そのため、本古墳出土鏡についても各分類との直接的な対応には若干の齟齬を感じさせる。いたずらに分類を煩雑にすることを考慮すれば、本古墳出土鏡の特徴は以下の諸点にまとめることが出来る。

- 1 珠文鏡、つまり鏡背内区の主文様が珠文によって飾られていること。
- 2 珠文帶は4列の珠文が比較的整然と配されていること。
- 3 珠文帶を4区画していること。このうち12時と6時は2本の細い隆起と乳、3時と9時方向は環状突起と房状突起によって区画されていること。
- 4 内区外縁は0.2cm間隔の細かい櫛歯文帶であること。
- 5 外区は素文で外区と内区との間に小さな段差があること。

これら諸点のうち、先に見た先学の諸分類と比較したところ、本古墳出土鏡の最も特徴的な点は上記の3に求めることができるであろう。ところで、珠文帶を放射線状に区画する文様は類例がいくつか認めることが出来る。しかしそれらの多くは乳や放射線状の隆起線によるものが多い。これに対し、本古墳出土鏡の内区文様、特に3時と9時方向に見られる房状の突起と環状の突起は極めて特異なもので管見ではその例を知らない。

そこで図面・写真で森下草司氏（京都大学）に鑑定を依頼した所、神像表現の影響についての指摘を受けた。すなわち、房状の突起はやや弧状になった三角形の塊に数本の刻線が認められる。この刻線が神像の裾表現の形骸化であり、環状突起を挟んで2個が対になっていることも神像表現との関連が窺われるというのである。

本古墳出土鏡の房状表現については極めて特殊な文様ではあるが、神獸鏡からの影響の可能性があるのではないか、という問題提起をもってまとめとかえたい。少なくとも本古墳出土鏡は放射区画珠文鏡、乳文鏡、神獸鏡等の異なる鏡式のデザイン情報を切り合わせて制作されたものと推察されるのである。

最後に鏡の年代であるが、近年の研究では珠文鏡の初源を4世紀半ば、あるいは前半にまで遡らせようという傾向が強い。北小原3号墳鏡の外区が素文であることも、小型仿製鏡の中では古層を帯びる特徴である^(注6)。

山雲地方ではこれまでの所、奥才12号墳^(注7)、御崎山古墳^(注8)、山地古墳^(注9)、などから珠文鏡が検出されている。このうち山地古墳出土の珠文鏡については、古墳墳丘裾部の土器棺が小谷式、4世

紀末と報告されている。本古墳山土鏡についても山土状況から推察すれば、「土器棺1」の年代を下ることはないと考えられ4世紀中～後半、あえていうならば小谷式＝布留式（前半）併行前後の時期に比定しておきたい。

2 小 結

北小原2号墳は長軸11m、短軸10の円墳、同3号墳は復元長11m、短軸9mの方墳である。4世紀の前期中規模古墳として位置付けられ、どちらも地山切り出しによって墳丘を築造している。2号墳は丘陵尾根の自然地形を利用して片面をテラス状に整形し、南西を「溝1」によって区画する。これに対し、3号墳は丘陵の高まり部分を利用して築かれたと考えられ周溝を有している。共に主体部は箱式石棺で主軸は2号墳が北より約54°東偏、北東から南西軸であるのに対し、3号墳は北より10°西偏（頭位はS-10°E）の南北方向を指向している。

その築造時期は、石棺遺物が少なくて決めていくが、裾部から出土した土器棺から概ね4世紀中～後半で収まるものと推定している。古墳群内の新古関係であるが、2号墳の石棺は保存・未調査で両石棺内の遺物組成の比較検討は出来なかった。その上で、2号墳と3号墳との境部分に「溝1」が位置することから、両古墳の関係上で重要なものと考えた。しかしながら、「溝1」は単層で深さも10cm前後と極めて浅く、肉眼では切り合い関係が確認できなかった。その他で調査によって切り合い関係が認められたのは以下のものである。

- 1 土器棺1は溝1の上層検出である（土器棺1は溝1を切る）。
- 2 土壙墓1は溝1の下層検出である（溝1が土壙墓1を切る）。
- 3 溝3は土壙墓1に切られる。

すなわち、確実な前後関係は溝3→土壙墓1→溝1堆積→土器棺1となる。これらから直ちには2基の古墳の前後関係は不明であるが、平面的には溝1が2号墳の墳丘を削っているような方向を示していたと思われた。また、溝1に切られた土壙墓1は当初、いわゆる周溝内土壤を想定したが、渡辺貞幸氏（松江市文化財保護審議会委員）に現場での検討をお願いしたところ、規模的に見て主体部として考えるべきとの教示を得た。

出土遺物からみれば、土器棺1は山陰地方特有の複合口縁を有する大型壺(5)と甕(6)であり、(5)は倒卵型の体部に底部穿孔しているものである。概ね小谷式（＝布留前半併行）の範疇に入るものと考えられるが、器形的に近似した山雲市山地古墳山土品^(注10)と比べると、体部は完全に球形化しておらず、それよりは古相を示していると考えられる。

これに対し土器棺2は単純口縁を持つ直口壺(7)と口縁端部に面を持つ広口甕(8)の大型土器で在地では極めて珍しい形態である。これらは、必ずしも直接の搬入を示すものではないかもしれないが、外来の影響を示唆する資料であるといえよう^(注11)。

2号墳石棺から出土した珠文鏡については、先述したようにいくつかの鏡式のモチーフを組み合わせて作られたものと想定された。

これらのように、本古墳山土品は、古墳時代前期の物質文化の情報の許容についても重要な意味を有しているものといえるだろう。

最後に本古墳群が持つ歴史的環境について若干述べてみたい。

まず、北小原古墳群に近接する金代1号墳であるが、これは位置と環境で述べたように本来的な地形では同丘陵上に位置し、時期的にも近似することから同一の古墳群として捕らえることができる。すなわち、北小原古墳群と金代1号墳は古墳時代前期における宍道湖北岸の奥津城を形成していたといえる。これらを構成しているのはいずれも径10~20m前後の中規模の円墳・方墳である。

ところで、古墳の規模や副葬品の質については、ある程度の階層的な身分秩序を表していたものと考えられており^(注1)、出雲地域においてもこの現象は認めることができる^(注2)。本古墳群の諸要素を繰り返すならば、規模的には径10~20m前後の円・方墳であること、直徑10cm前後の小型仿製鏡を副葬すること、などを挙げることができる。主体部は北小原3号墳は壇方外にも礫を敷くという入念な構造を有する礫床の箱式石棺であり、金代1号墳は古墳群の中でも墳丘規模が20mと大きく、出雲地域では希少な粘土櫛を有するなど独自の位置を与えることができるであろう。そのことは即ち、古墳に埋葬された首長層の立場を反映しているものと考えられる。

いずれにせよ、当地域では古墳時代中期に至って古曾志大谷古墳群、丹下庵古墳など大規模な古墳が形成されており、奈良時代の『風土記』の図引き神話では「狭田国」という名称が登場するなど古代出雲の歴史を知る上で極めて重要なフィールドであるといえるであろう。

注(1) 桶口隆康 「古鏡」 1979

(2) 小林三郎 「古墳時代仿製鏡の鏡式について」 『明治大学人文科学研究紀要21』 1983

(3) 森下章司 「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」 『史林』74-6 1991

(4) 今井 晓 「中・四国地方古墳出土素文・重圓文・珠文鏡一小笠倭鏡の再検討I-」 『古代吉備』9 1991

(5) 吉田博行 「放射線状区画を持つ珠文・乳文鏡について」 『森北古墳群』 1999

(6) 前掲 注3

(7) 『奥才古墳群』 鹿島町教育委員会 1985

(8) 『御崎山古墳の研究』 八雲立つ風上記の丘研究紀要III 島根県八雲立つ風上記の丘 1996

(9) 『山地古墳発掘調査報告書』 出雲市教育委員会 1986

(10) 松山智弘 「小谷式再検討—出雲平野における新資料から—」 『島根考古学会誌17』 2000

(11) 胎上的にみても非在地的な特徴のようである。搬入の可能性、胎土については赤澤秀則氏より多くの教示を得た。

(12) 都出比呂志 「前方後円墳体制と民族形成」 『待兼山論集27』 1983

(13) 渡辺貞幸 「古墳時代の出雲」 『明日香風』22 1987

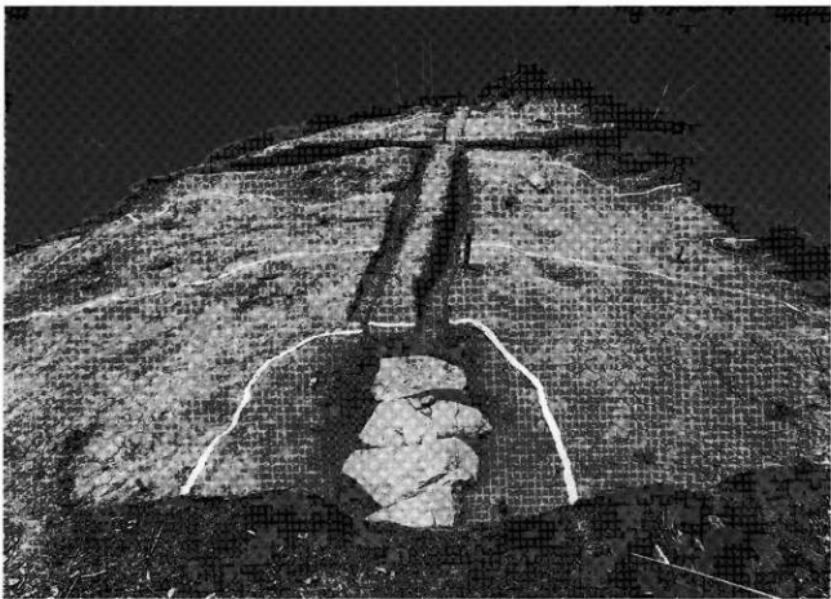
同 「出雲における古墳時代の開始」 『東アジアの古代文化』69 1991

赤澤秀則 「出雲地方前期古墳の系譜と階層性」 『田中義昭先生退官記念論集 地域に根ざして』 1999

図 版



北小原 2号墳（南西から）



2号墳箱式石棺、溝1、土器棺1（北東から）



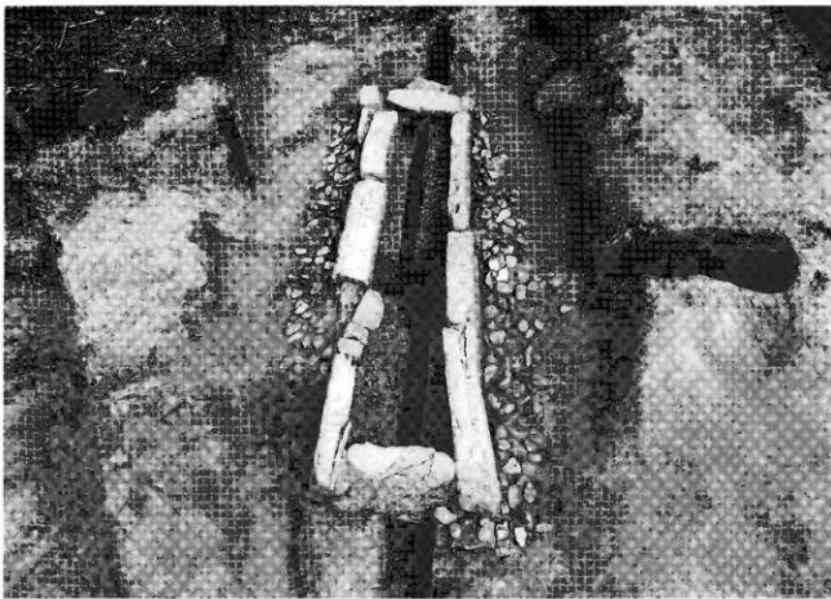
溝1、3、土壤墓1土層断面



北小原3号墳(東から)

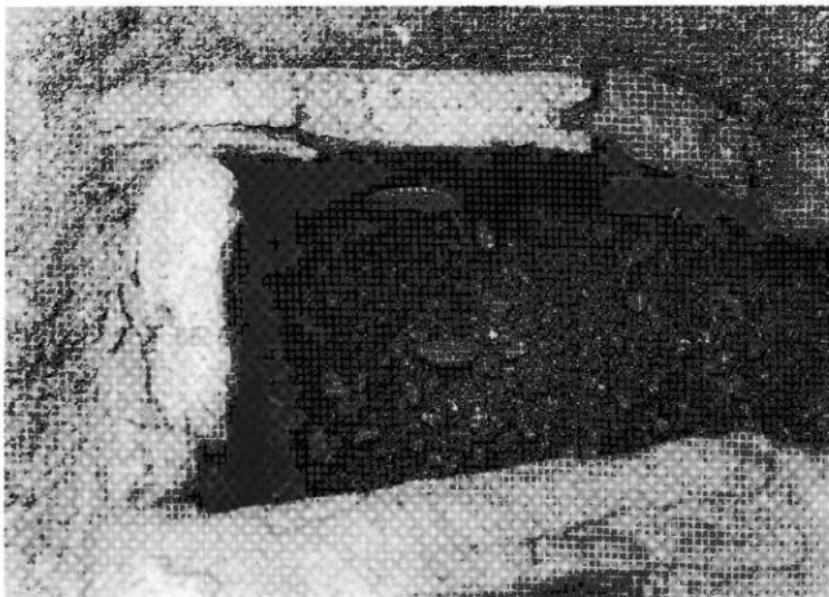


北小原 3 号墳、溝 2（西から）

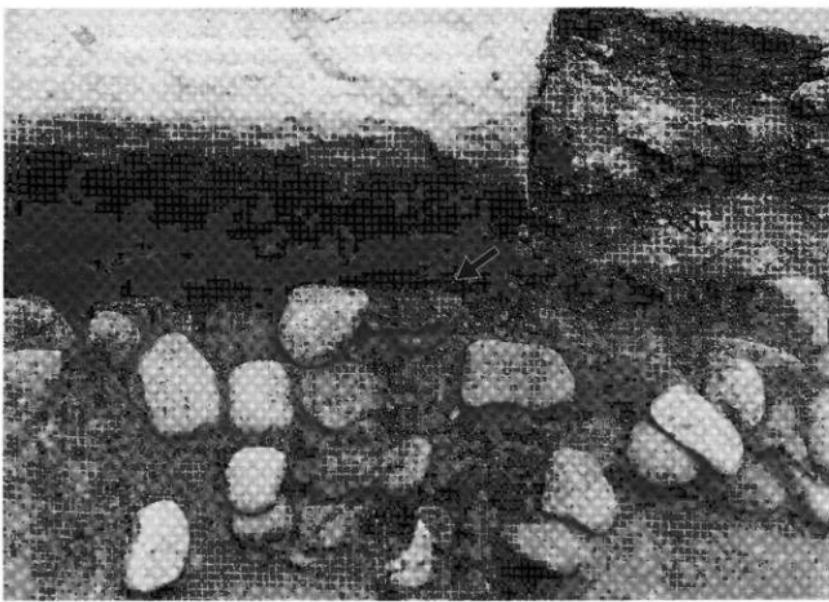


北小原 3 号墳箱式石棺

図版 4



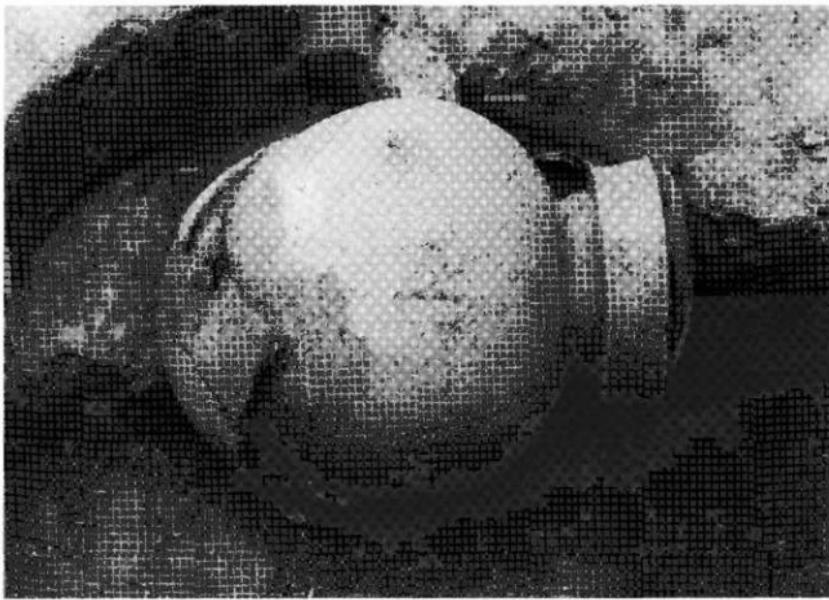
北小原 3 号填箱式石棺珠文鏡復元検出状況



北小原 3 号填箱式石棺外鉄製品検出状況



土器棺 1 検出状況



同上 土器片撤去後



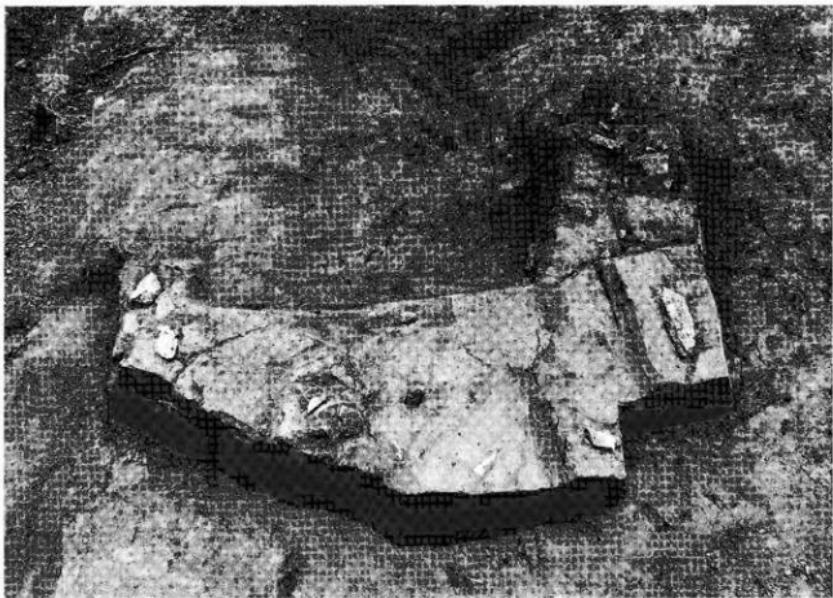
土器棺2 棺 出 状 況



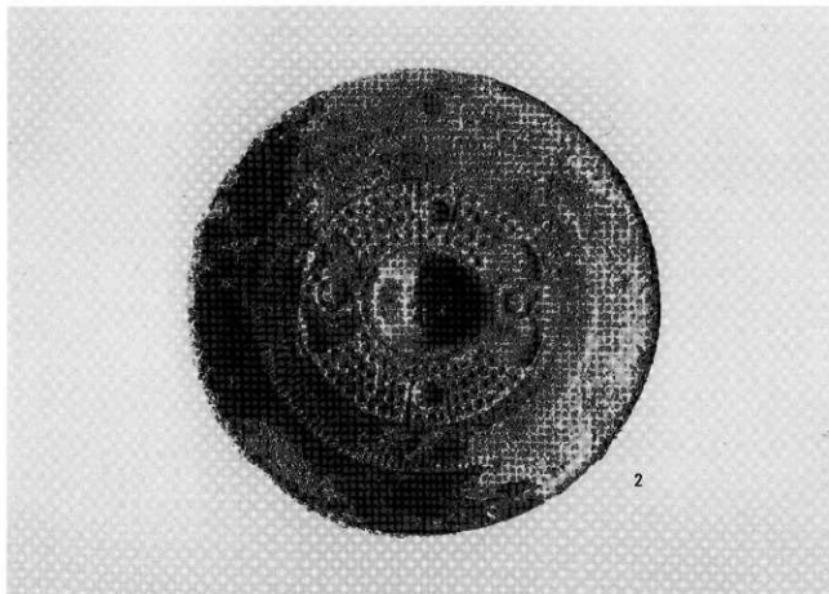
土壤墓1、溝3 全 景



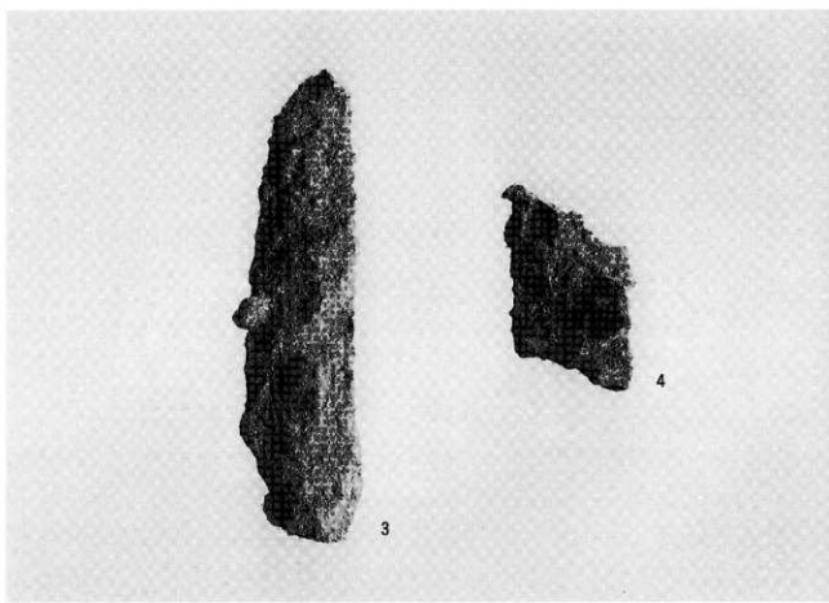
土坡墓 1 枕 状 石



溝 1 石材集積地点



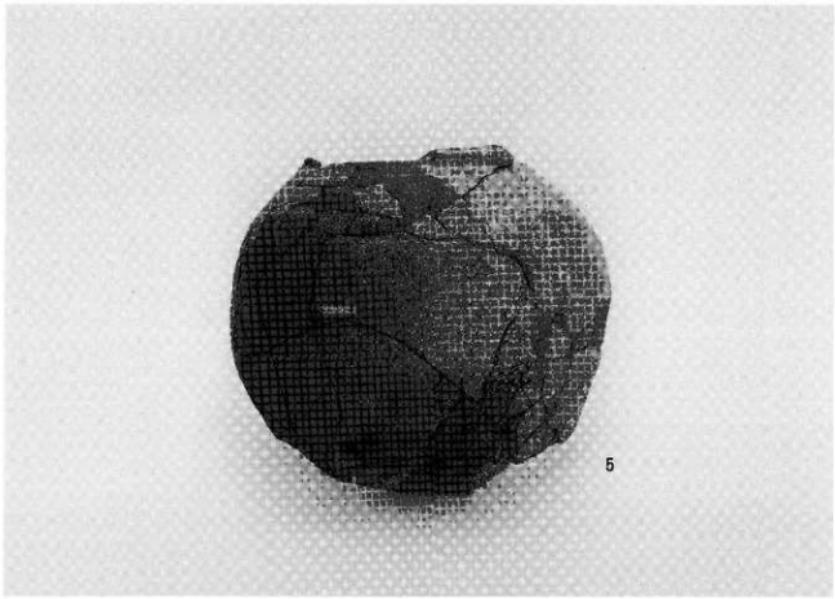
3号填箱式石棺 出土珠文鏡



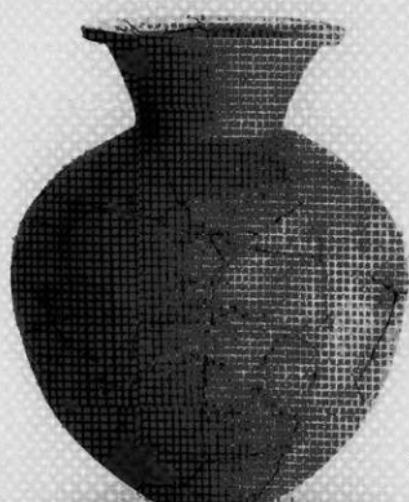
同上 鐵 製 品



土器棺 1 出土遺物（棺身）



同上（棺蓋）



土器棺2 出土遺物



同上



1

清1 出土遺物



9



10

表土・包含層出土遺物

松江市文化財調査報告書 第85集

北小原古墳群発掘調査報告書

2000年9月

発行 松江市教育委員会
財團法人松江市教育文化振興事業団

印刷 傅松陽印刷所